広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第41号　2013．3〉

# モードのジャポニスムを通して日本の布と着物のちからを発見する衣生活領域の授業開発

高橋美与子　柴　静子　日浦美智代　一ノ瀬孝恵
佐藤　敦子　高田　宏

## １．はじめに

戦後日本の急速な衣生活改善の結果，伝統的衣装である着物が行事以外ではほとんど着られなくなり，洋服が衣生活の中心を占めるようになってきた。しかし，日本の伝統文化の継承･発展の必要性という観点から見ると，着物の果たしてきた役割と価値には大きいものがある。

着物の素材となっている布には，古来より苧麻，麻，絹，木綿，羊毛といった天然繊維が利用されていたが，近年はポリエステルやレーヨンなどの化学繊維の使用が伸びている。このような繊維の中でも，とりわけ日本的な特徴を持つのは絹である。繭から生糸を製造する製糸業は，明治初期の近代化という大目的のために基幹産業として貢献し，シルクカントリー・ジャパンとまで言わしめた。生糸は，当時，日本各地で生産され，主には高級な着物として消費されただけでなく，欧米に輸出されて莫大な外貨を得た。さらには絹織物として海を渡り，日本の織物技術と文化の秀逸性を知らしめた，私たちにとっては特別な意味をもつ繊維なのである。このような絹を中心とした様々な繊維や布のもつ価値を再発見し，未来に向けて思考を展開させて伝統文化を継承発展させることは，若い世代に向けての衣生活教育の重要な課題である。

総じていえば，衣生活の学習には，①衣に関する科学を学び，科学的な思考方法を身につけて日常生活を合理的なものに改善することができる，②針と糸と布を使ったものつくりの体験により，手指の巧緻性が高まるとともに，ものを創造することの楽しさを味わい，また忍耐の必要性を実感して，精神を豊かに育むことができる，そして③わが国の世界に誇るべき布や衣服・衣装の学習を通してこれらに対する敬意が芽生え，伝統文化を継承発展させようとする気持が生まれて，これが日本人としてのアイデンティティに結びつく，という教育的価値が備わっている。

それでは，高等学校家庭科『家庭基礎』において，①②③を同時に組み込んだ衣生活学習は可能であろうか。私どもは，これまでの衣生活に関する共同研究の過程で，苧麻・木綿・絹といった天然繊維からできた『布のちから』がいかに人々の暮らしに大きな影響を与えてきたかについて理解することができた。そこで本研究では，先述のように日本の近代化のための主要産業として大きな役割を果たした生糸・絹，そして現在でも脈々と各地に受け継がれている天然繊維や天然染料による染織，さらには19世紀末から20世紀初頭にかけて西洋のファッション革命を誘発したといわれている着物のもつ『ちから』について，生徒に発見・理解させ，それを未来に向けて発展させたいと考えた。

本研究では，モードのジャポニスムとして西欧に熱烈に受け入れられた着物が，コルセットによって成形された窮屈なドレスの構造そのものを変えるという『ちから』をもったこと，そしてこのような日本の衣生活文化を未来へとつなぐ方途について考えさせる授業を『家庭基礎』で実施し，アンケート等を通して学習効果を測ることを目的とした。その上でこのタイプの授業をモデル化するための視点を得ることにした。

## ２．先行研究としての衣生活領域の授業実践

### （１）他民族の衣生活を取り上げた授業実践

先述したとおり，日本では，近年，ポリエステルを初めとする化学繊維の使用が増大し，天然繊維を使用した衣類の割合は低下している。加えて，天然染料によって糸や織布の染色を行っている工房は各地を見廻しても数少なく，さらに手織機による織布の製造に至っては，備後絣，大島紬，結城紬，十日町紬などの伝統的織物の産地で僅かに行われているのみである。

このようなことから，自然界から天然繊維を取り出し，糸に紡いで手機にかけ，布を織り天然染料で染めて，手縫いで衣服をつくる，といった人間本来の営みは，わが国では今や殆ど見ることができなくなってい

Miyoko Takahashi,Shizuko Shiba, Michiyo Hiura,Takae Ichinose,Atsuko Sato,Hiroshi Takata : Development of clothing education on the power of japanese textile and kimono by the learning of fashion in japonisme

る。しかし，世界にはまだこの本来的な衣生活の営みを守り続けている人々が存在しているのである。

例えば，ラオス，ベトナム，タイの高地に住む「モン族」はそのような人々であり，『針と糸の民』といわれるほど刺繍の技術に優れており，また天然藍による染色にも秀でている。麻を栽培し，その繊維を取り出すところから始めて，織布，染色，刺繍，縫製という全行程を手作業で進めて作る民族衣裳は，実用性を越えて芸術的なものとして，世界から注目されている。

このようなモン族の衣生活を学ぶことによって，日本の伝統的な衣生活文化を発見し，その重要性を再認識してこれからの生活に役立たせる力を養うきっかけとなると考えた。そこで私どもは，平成20年度の学部・附属共同研究において，広島大学附属高等学校１年生を対象とした「モン族」の衣生活をテーマとする実験授業を実施した。その結果，生徒の興味と学びにおいて，高い効果を上げたことが明らかになった[1)]。

その後，平成22年には，附属福山高等学校において，①保育園訪問の際に持参する布絵本の製作と②モン族の衣生活の学習，そして③新しい研究課題である『モードのジャポニスム』を統合する実験的な授業を実施した。これは，今回の研究を先導するものであったことから，以下にその授業構成と要点を略記する。

**（２）附属福山高等学校における「モードのジャポニスム」を取り入れた衣生活の授業実践**

2010年９月29日～11月19日のうちの10時間及び課外の時間を充てて，附属福山高等学校１年B組（40人）を対象として「モードのジャポニスム」を取り入れた衣生活領域の授業を実施した。授業者は高橋美与子教諭であった。授業は以下のように構成した。

（指導計画）

（１）「針と糸の民モン族」について……２時間
（２）自分の衣生活を振り返る……１時間
（３）「南部菱刺し」，「BORO」について……１時間
（４）着物について……１時間
（５）モードのジャポニスムの研究とまとめ…３時間
（６）新たな衣生活観を創る……２時間
（７）この他に保育・家族生活の時間を使った小物の製作に６時間及び課外での調べ学習に数時間を予定。

（指導内容の概要）

（ア）保育園に持って行く名札や布絵本の製作，家族へのお守り作りなどを通して個性を生かした作品を創造するとともに，針と糸に親しませる。

①手作りの体験からその楽しさや達成感を感じる。
②縫うための基本作業を身につける。
③身近な衣服の繊維の種類や特徴など，布地に関する基本的な知識を身につける。

（イ）着物や自分の衣生活についてテーマを一つ選んで調べさせる。（夏の課題）

① 着物について
・着物の種類，構成，歴史などを調べる。
・着物について身近な人の意見を聞く。
・自分の生活と着物の関わりについて考える。
② 自分が持っている衣服について
・制服やジーンズなど自分がよく着る衣服について，その歴史などを調べる。
・自分が持っている衣服の種類や特徴から自分の衣生活について考える。
・お気に入りの衣服のブランド，布地や繊維の種類，手入れ方法などについて調べる。

（ウ）「針と糸の民・モン族」と「BORO」等のビデオを視聴させる。モン族のスカート，南部菱刺しや襤褸の学習を通して，人と衣生活の関わりについて，衣は身につける目的以外にも役割があることを理解させる。

①モン族のスカートや日本の着物に昔から使用されている麻・絹・木綿といった天然繊維や藍染の特徴・役割を理解し日本や他国の衣文化や着物を含む民族衣装に関心を持つ。
②身近な被服材料についての知識を深める。
③モン族の衣装や南部菱刺し，襤褸に込められた家族への思いを理解し，人と衣の関わりの深さと衣が身近な人たちに思いを伝えるための手段になることに気づくとともに，刺繍やまっすぐで細かい縫い目などの手の技に注目する。
④アジアの他民族の生活に関心を持つ。

（エ）日本の伝統的衣である着物について学習する。

①歴史，構成，種類，布地，マナーなど着物に関する基礎的な知識を得る。着物の奥深さについて考える。

（オ）着物が西欧のファッションにどんな影響を及ぼしたのかを班別にテーマを決めて調べ，発表させる[2)]。

①西欧に渡った「ヤポンセロッケン」とは何か
②着物地を使用して作ったヨーロッパのドレスについて
③着物姿で西洋の人々を魅了した「川上貞奴」について
④日本の絹織物・着物ガウンなどを輸出しジャポニスムの先駆けとなった「椎野正兵衛」について
⑤西洋のファッションに欠かせなかったコルセットについて
⑥着物のゆったりとしたデザインを洋服に取り入れたデザイナー「ポール・ポワレ」について
⑦着物の直線裁ちでドレスをデザインした「マドレーヌ・ヴィオネ」について
⑧新ジャポニスムについて

（カ）「モードのジャポニスム」の学習を通して，着物が西洋のファッション革命に与えた影響について理解させ，着物に対して抱いていた価値観を変化させる。

①1600年～1800年にかけて日本の着物を改良して作られた室内着がゆったりとした着心地の良い形や綿入れの技術と暖かさ，豪華な生地の魅力で，ヨーロッパで人気を得る。また着物の生地から多くのドレスが作られていった。
②1900年頃には，着物の直線裁ちの構成を生かしたドレスがデザインされ，コルセットでウエストを締め付けるというデザインに取って代わっていった。

（キ）自分の衣生活を振り返り新たな衣生活観を創る。

①着物の構成を新デザインに取り入れていった「ポール・ポワレ」や「マドレーヌ・ヴィオネ」の考え方から学ぶ。
②今まで当たり前だと考えていた自分の衣生活を，これでいいのかと振り返ってみる。
③様々な情報を取り入れることで，新たな考え方が生まれてくることを実感し，これからの衣生活に活かす。
④情報に振り回されるのではなく取捨選択することが大切。

以上の取り組みは，日常的な衣生活の理解と技能習得という従来の範囲を越えて，日本と他国間の衣装の交流史と着物のちからを発見させる学習の可能性を示した。

## ３．本研究における授業構築の視点と学習指導の実際

### （１）『モードのジャポニスム」の授業構築の視点

先の附属福山高等学校での授業実践を踏まえながらも，今回は異なった視点から，「モードのジャポニスムを通して日本の布と着物のちからを発見する衣生活領域の授業」の開発を行った。実験的な授業は，広島大学附属高等学校1年5組において，2012年11月７日から12月１日（土）のうち５時間かけて実施した。授業者は日浦美智代教諭であった。

ファストファッションということばが流行し，現代の衣生活を取り巻く状況は，近年大きく変化している。大量生産・大量消費されることにより廃棄されている衣服の量は年間約100万トンとも150万トンともいわれている。廃棄衣料の多くがリサイクルされることなく焼却や埋め立てにされているのが現状である。生活にとって欠かすことのできない存在であり，毎日身につけている衣服であるにもかかわらず，我々は，この衣服がどこでどのように生産されているのか，どうして低価格で販売されているのか，その実態について知らないことがあまりにも多すぎるように思われる。

2011年３月，予想もしなかった未曾有の東日本大震災が起こった。震災後，誰もが家庭生活のあり方を見つめること，生活の中で科学技術に依存しない伝統的な生活のあり方についてあらためて具体的に考える意識が高まってきた。

生活文化は時代背景や社会の影響を受けながら変容するものである。現代では，生活スタイルの変化にともない，生活着として和服は洋服に変わっている。着物は，私たちの家庭生活の中で母親から娘へと受け継がれてきた。着付けも一人では簡単にできないため，母から娘へと伝えられてきたものである。着物や織物を通して，日本の伝統的な生活文化の背景と人々の願い，生活の知恵について再考させたいと考えた。

第２次･第３次の授業は，「モードのジャポニスム」を通して，これまで連綿と受け継がれてきた日本の伝統文化，生活文化を未来へつなげていくためにどうあるべきなのかを考えさせる授業を試みた。生徒には，第２次に映像資料「ファッションデザインのジャポニズム」（1994年５月23日NHK教育放映）（表１）を視聴させ，また対応する図録を与えた。さらに実物の衣装にふれさせて，日本文化，着物が西欧モードに与えた影響について理解するように授業を組み立てた。

第３次では，モードのジャポニスムの視点から衣装に関する日本と西欧文化との交流の歴史を知り，日本の伝統を未来へつなぐということについて考えさせた。

以上のように，21世紀に残したい，次の世代へ伝えたい日本の伝統文化をプロジェクトするというテーマの流れの中で，実験的な授業を展開し，これまで生活の中で世代を超えて受け継がれてきた衣装や織物，布素材への考察を通して，伝統文化再発見の切り口とし，伝統を未来へと橋渡しをすることを目標とした。

### （２）学習指導の実際

全５時間の学習過程は表２に示したとおりである。授業目標は，次の３つとした。

①衣生活文化に関心を持ち伝統的な衣生活文化を知る。

②「モードのジャポニスム」から，日本の着物が西欧の衣装に影響を与えたことを知る。

③伝統文化を未来へつなぐことについて考える。

**表１　映像資料「ファッションデザインのジャポニズム」の内容**

ファッションデザインのジャポニズム
～キモノから生まれたゆとりの美～

日本の衣装文化はモードの歴史に大きな影響を与えてきた。

着物は江戸時代から西欧へ（17 世紀～18 世紀）

着物はいつから西洋に渡っていたのか。それは，日本が鎖国をしていた 17 世紀にさかのぼる。当時，外国との通商は長崎出島のオランダ商館を通じてのみであった。オランダ人一行は年に一度江戸へ行き，将軍との謁見をしていた。当時，将軍からオランダへの贈り物は絹製で真綿入りの着物であった。多い年には 120 枚も贈られ，これがヨーロッパに渡ったといわれる。

18 世紀　西洋のガウン

着物のようで着物ではない。しかし日本の文様が施されている。モードの世界にジャポニスムの影響があったことがわかる。着物の特徴は形。着物の形は洋服とは全く異なる。特に違うのは，袖の下が極めて長いこと。そして，前開きが大きく重ね着しやすいということ。着物の「ベルト」も特徴的。フランス人は着物を着るなら帯はしめない。着物はベルト一つで形の変わる衣服である。

ヤポンセ・ロッケン（日本語で部屋着のこと）

着物文様の豪華さゆったりとした着心地。男性用室内着として人気があった。着物のたもとをおとし，西洋風の筒袖に縫い変えた。17～18 世紀にかけてヤポンセロッケンは上流階級のステータスシンボルであった。日本からの輸入だけでは需要に応えられず，インド製のコピーもつくられた。着物の形や仕立て，文様をまねている。インド製コピーはよく見ると松の木から扇が生えるといった風変わりなデザインをしている。

1867 年のパリ万博

着物が本格的に西洋に知られるようになったのは万国博覧会においてである。日本は 1867 年のパリ万博から

正式参加。当時，徳川幕府は日本館を作り，浮世絵や陶器日常品を出品。何より人気を集めたのは日本館で接待する着物を着た女性であった。これが西洋の一般の人々に着物が目に触れた最初の機会であった。1867 年の万博では，着物を着て接待をする女性が注目された。

川上貞奴

1900 年パリで女優の川上貞奴が着こなす着物に人々は魅せられた。ピカソのスケッチした着物姿の肖像画にも登場。モード雑誌が競って貞奴を取り上げ，エキゾチックな着物の姿を賞賛した。貞奴の人気にあやかり室内着として「KIMONO　SADAYACCO」を売り出す広告もできた。

画家のマネ，モネ，ホイッスラー，ゴッホ

画家たちは着物への関心を一番に示した。ジャポニスムの波が訪れその中で着物は日本主義の象徴であった。彼らは驚くほど精密に着物のデザインを描いている。西洋とは全く異質の色調，柄，仕立てに魅せられていった。

1873 年　ウィーン万国博覧会

19 世紀後半，当時日本の主要な生産品は絹であった。明治政府は絹を使った製品の輸出を考えていた。横浜の絹物商人椎野正兵衛は明治政府の意向を受け，西洋での絹製品の市場調査を行った。椎野らはここで西洋の人々のファッションの好みを調査。ガウン（室内着）に目をつけた。万博から 2 年後，1875 年に椎野が輸出した室内着。ガウンのラベルにはＳがある。中綿をつぶさないように，手縫いでキルティングを施している。当時，日本独特の手法であった。1870 年代主流であったバッスル・スタイルの後部が大きく膨らんだ形そのまま。椎野が考案した日本製のガウンは異人の寝間着といわれた。模様は西洋の草花や小鳥の柄である。西洋で人気を呼び，20 世紀はじめには年間およそ 40 万着も輸出された。

ウォルト

19 世紀，西洋の女性の衣服は外出着と室内着にはっきりと分かれていた。当時，着物は絹製ガウンとして人気があったとはいえ，室内で着る服でしかなかった。このような中，日本的なものを外出着として取り入れたのは在仏のイギリス人デザイナー，ウォルトであった。彼の作るドレスは，19 世紀のヨーロッパの女性に対する美意識を象徴していた。美しいシルエットを強調するため細いウエストからゆったりと大きく裾が広がっている。顧客にショーを魅せて注文を受けるオートクチュールの形式を作り出したのもウォルトであった。彼は上流階級向けの豪華な布地や柄を使ったドレスを作った。

1892 年ごろのイヴニングドレス

ウォルトは日本的な文様を意識するようになっていた。このドレスではひな菊の文様の上にチューリップの柄を重ねている。ひな菊は着物によく見られる手法。兜の文様は横向きに配列しているため不思議な雰囲気を漂わせている。兜という日本のモチーフを使っているが，配置は左右対称で極めて西洋的な感覚である。太陽と雲のモチーフでは光が斜め上方に向かってさし，雲は不規則に配置されている。西洋的な左右対照的な構図が大胆に崩されている。こうした配置は日本の着物や美術工芸品の影響が考えられる。当時，デザイナーたちはこぞって菊，波，つばめ，蝶など日本的な柄を西洋のドレスに取り入れたといわれる。

コルセット

19 世紀西洋の女性たちは何重にもペチコートを重ね着し，スカートを膨らませ，ウエストを細くするための下着であるコルセットを身につけていた。胸とおしりを強調するためにウエストを極端に細くするのが 19 世紀の美意識であった。ヨーロッパの女性になくてはならないコルセットがウエストを締め付けていた。1902 年フランスの文部省はコルセットは身体にとって危険であるということで禁止した。この頃，西洋の人々はコルセットと対局にある着物のゆとりに注目し始めた。

ポアレ

20 世紀初め，フランスのデザイナー，ポワレは着物のゆとりを西洋に取り入れた。アトリエには多くの日本の着物があった。彼は着物からインスピレーションを受け，着物の面影が強いコートを発表。平面的な布をしなやかに包み込む着物コートはコルセットを必要としなかった。女性からコルセットを解放する第一歩となる。

着物の構造

着物の文様を受け入れることから始まったモードのジャポニスムは西洋の衣装の構造改革にまで影響した。長い間，女性の体を成形してきたコルセットを外す，というモードの転換点に「着物のゆとり」があった。

ヴィオネ

1920 年代ヴィオネは年代着物の直線的な裁断に影響を受け，西洋の服のカットの概念を根底から覆した。四角形や三角形に裁断した布を組み合わせて服を作った。人間の体の形にそって布をカットするこれまでの方法とは違ったものである。

女性の社会進出

第 1 次世界大戦後，女性が社会進出。活動的な衣服へ。服に徹底した機能性を追求した。裏地のないスーツを作り軽さを追求した。活動的な衣服は再びからだの線をなぞり締め付ける方向になる。そして，着物の持つゆとりは流行遅れになっていく。

1960 年代以降

三宅一生ら日本人デザイナーの活躍により，ファッションのジャポニスムがその魅力を再び取り戻す。

**表２　学習過程**

| 学習内容 | 指　導　内　容　・　学　習　活　動 | 指導上の留意点・評価 |
|---|---|---|
| 第１次：１時間<br>衣生活の現状 | ○事前アンケート実施<br>○我々を取り巻く現代の衣生活の現状を理解する。ＶＴＲ「日本の現場−どこへ行くあなたの古着−」を視聴し，古着の量とリサイクル状況を理解する。<br>○繊維リサイクルの現場を知り，繊維リサイクルが世界へつながっていることを知る。 | ○科学技術の進歩と環境問題，これからの生活文化について自分とのかかわり，改善すべき衣生活について考える。（思考・判断） |
| 第２次：２時間＋課外<br>モードのジャポニスム | ○ＶＴＲ視聴「ファッションデザインのジャポニズム」から，日本と西欧文化との交流の歴史を通して，モードのジャポニスム，日本文化および日本の着物が西欧文化へ与えた影響を知る。<br>○モードのジャポニスムをデザインで表現している西洋の衣装を観察する。<br>○京都服飾文化研究財団の図録「モードのジャポニスム」を参考にして，衣装の「ジャポニスム」とはどのようなことだろうか，発見的に考える。 | ○19 世紀後半に起こったジャポニスムの展開を理解する。（知識・理解） |
| 第３次：２時間<br>＜1 時間目＞<br>日本の伝統と文化再発見 | ○ＶＴＲ視聴「三宅一生　東北へ伝統を未来へつなぐ旅」により，布のちからが人々の生活，暮らしを支えてきたことを理解する。<br>○これまで我々の生活の中で世代を超えて受け継がれてきた衣装，布，伝統的な素材を通して，多様な角度から衣生活文化を捉え，伝統文化の再発見の切り口とし，伝統を未来への橋渡しをすることを考える。 | ○日本人は何を着てきたか，これまでの衣生活文化の背景，未来の衣生活について考えようとしている。（関心・意欲・態度） |
| 第３次：＜２時間目＞<br>衣生活文化<br><br>モードのジャポニスム<br><br>次の世代へつなげるジャポニスム<br><br>未来の衣生活文化 | ○先人によって作られた繊維によって，我々の生活が成り立っていること，地域や家庭で生活文化が伝承されていることに気付く。<br>○日本と西欧文化との交流の歴史，西欧モードに影響した日本文化の歴史的展開を理解する。<br>○「『ジャポニスム』私の発見」を発表する。<br>○「これからのファッションデザインの可能性」を発表する。<br>○生活文化は主体的につくりだすものであることを認識，伝統文化を未来へ継承，発展させること，豊かな衣生活文化のあり方について考える。 | ○生活文化は社会状況や価値観の変化によって変容するものであることに気付く。（知識・理解）<br>○布のちからが人々の生活，暮らしを支えてきたことを理解する。<br>○次の世代へ残したい日本の文化と伝統を発表する。（思考・判断）<br>○これから豊かな生活を営むために衣生活とどのように関わっていく必要があるか考えることができる。（関心・意欲・態度） |

・使用教科書：家庭基礎（大修館書店）
・参考資料：　図録「モードのジャポニスム」京都服飾文化研究財団
・映像資料：　・「ファッションデザインのジャポニスム①着物から現代服へ」1994 年 5 月 23 日『NHK 教育』放映
　　・「三宅一生　東北へ　伝統を未来へつなぐ旅」2012 年１月４日『NHK 総合』放映
　　・「美の壺　ウェデイングドレス」　2012 年 11 月 21 日『NHKBS プレミアム』放映
・朝日新聞記事 2012 年 11 月 22 日　「プリーツプリーズ 20 年　ひだが作る普遍の美」
・モードのジャポニスムに関連した実物衣装 17 点（アメリカ，イギリスから購入した着物ガウン，ドレス）

## ４．アンケート等による授業の評価

### （１）実物衣装を観察した生徒の感想・気づき

第２次では，「ジャポニスム」と「西洋の衣装革命」に関連した実物衣装を生徒に観察させた。その際の感想・気づきを表３に示した。実物に触れたことにより，美しいシルク生地を使用し，装飾を加えて魅力的な形に仕立てられたドレスだが，コルセットを必要とするいかにも小さな服であり，どれほど体を締め付けなければ着ることができなかったのか，思いをはせていた。

### （２）第３次２時間目の授業より生徒発表「『ジャポニスム』私の発見」から

○モードのジャポニスムは過去から存在していて，今でも続いている。芸術は発想からつくられるが，まだその元となる発想は出つくしていないし，出つくすこともないだろう。創作の源となる人の発想が絶えない限り，ファッションデザインの可能性も絶えることはないのではないかと思う。和服と洋服の融合も発想の発展に大きく貢献すると感じる。

○日本でも英語，フランス語，ドイツ語など外国の言語がプリントされている服はたくさん売られている。日本人はそういったデザインの服を漠然とかっこいいと感じ，洗練されていると思う。

同じように日本語がプリントされた服が外国で通用してもいいのではないかと思った。しかし，普通のひらがな，カタカナ，漢字では言葉の意味によってはかっこわるいものになってしまうこともありうる。だから，このドレスは和風でありながらそのかっこよさを失わずに洗練された印象を与えられているので，良い服だなと思った。

○着物とそっくりな服だけど，柄が着物っぽいからそう見えるだけで，実は生地や形も洋服と同じようなものを使っている。日本の着物の柄と生地に古い帯の一部も使われていて，洋と和の調和された服だと思う。

○ジャポニスムとは，日本のゆったりとした着心地や模様とヨーロッパのデザイナーの感性がまざって，はじめて作られているものだということが分かった。

**表３　実物衣装の特徴と生徒の感想･気づき**

| 衣　装 | 生徒が観察したドレスの特徴 | 生徒の感想・気づき |
|---|---|---|
| ラベンダーのドレス | エドワード期の絹のドレス。<br>袖と胸元が着物風になっている。<br>コルセットを必要とする。 | 着物から着想を得ているのか布の端に日本風のデザイン，ラベンダーが描いてあるのが，和と洋が混ざり合っていていいと思います。コルセットのきつさと腕の部分のゆるさも和と洋の融合で良いと思います。 |
| 金茶のドレス | イギリスから購入した100年以上前のバッスルドレス<br>コルセットが必要である<br>上着の裏地の柄は日本風<br>上着の形状維持のためにハリガネのようなものが通されている | 見た感じでは，金茶色ということもあり，高級感が出ていて，大人な女性に似合うと思いました。また，上着がかなり細いので，ボディラインが生かされて，エレガントに決まると思います。一見にはジャポニスムとはわかりませんが，それがまた独特の雰囲気を出していておしゃれでした。 |
| アール・デコビーズドレス | 1930年代のもの。平面的，波，うず潮の模様<br>左右対称の柄 | コルセットを着けずに着られる新しい服だとわかった。胸元が豪華。欧米の良いところと日本の良いところを取り入れて素晴らしい |
| 着物風ガウン | 欧米に輸出された着物風ガウン<br>着物と若干異なり，身頃は完全な直線裁ちではない。前身頃と後身頃の間に余分な布を入れて裾に向かって穏やかに広がるフォームを作っている。<br>日本の花の刺繍が施してある。 | 日本風のものが欧米に輸出されていたことは驚きである。<br>刺繍が豪華である。<br>・とてもゆるやかで着やすそう。 |
| イヴニングドレス | ゆるい直線的なシルエットで一枚の布からできている。左右対称の模様。松の模様が描かれていて日本の代表的なモチーフである | 松の模様が使われていることから日本に伝わる文化が取り入れられている。ゆるいシルエットであることから西洋人のコルセットから解放されたいという思いが表れている。 |

### （3）第３次２時間目授業より生徒発表「これからのファッションデザインの可能性」から

○ある国の文化を他の国の技術で創り上げることで，一味違った服ができる。さらに相互の文化を理解し合うことによって国際貢献さえも可能となる。世界のある限られた地域でしか入手できない原料を世界に幅広く輸出し，その貴重さをいかすことができる。各国独自の技術が合わさりとても大きな一つの技術となって革新的な衣服を次々と作り出せる。

○日本は19世紀半ば，ジャポニスムを引き起こし，伝統芸能歌舞伎や能，さらには折り紙，武具，漢字，和紙，最近ではマンガなどにおいて「日本」のデザインが使われている。三宅一生さんは1991年に「プリーツプリーズ」を生み出した。国内繊維産業の粋を集めた素材と技術，独自の発想，行動する女性のために作られた時代性があり，世界中で愛され，これまでに27カ国で435万枚が売れたという。これからのファッションデザインは，時代性をふまえ，新しい日本の姿を象徴するようなものもあってもよいだろう。また，年齢層など特定せず，多くの世代に親しまれる服もあっていいと思う。図録「モードのジャポニスム」（京都服飾文化研究財団）に掲載されているシャネルのシルク・サテン，着物風の打ち合わせになったドレスは，個人的には「未来へつながるこれからの服」だと思う。なぜなら，派手なデザインを避け，しかも，全体のシルエットは日本の着物を感じさせているからである。

### （4）アンケートに見られる生徒の意識

「モードのジャポニスムを通して日本の布と着物のちからを発見する衣生活領域の授業」では，学習前と学習後にアンケート調査を行った。事前と事後の調査項目は基本的には同じものとした。事前調査は，授業実践を行う１年５組37名を対象として，2012年11月７日（水）に実施した。事後調査は，同年12月５日（水）に実施した。

事前と事後の調査では，「モードのジャポニスム」，「布そのものや製作への関心」，「伝統文化の学習への意識」ついて尋ねた。（図１）が示しているように，「モードのジャポニスムを知っているか。」という質問に対して，クラス全員の生徒が知らない，と答えた。次に，（図２）が示しているように，「モードのジャポニスムへの興味はあるか。」という質問に対しては，「とても興味がある」もしくは「やや興味がある」と答えた生徒は65％であった。29％の生徒は「あまり興味がない」，「全く興味がない」と答え，５％の生徒は「わからない」と答えた。このように「ジャポニスム」とは何か，生徒にとっては全く未知の状態から授業はスタートしたが，生徒の半数以上は，この学習に興味を示していた。

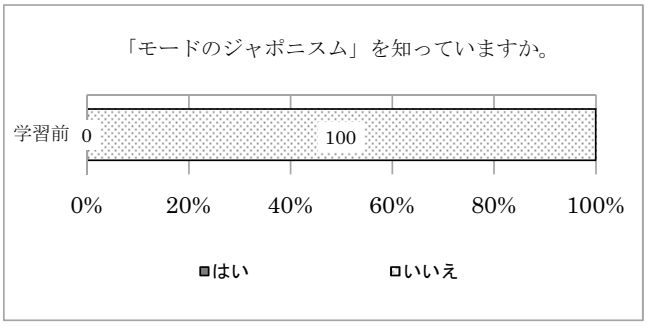



**図１　モードのジャポニスムの認知度**

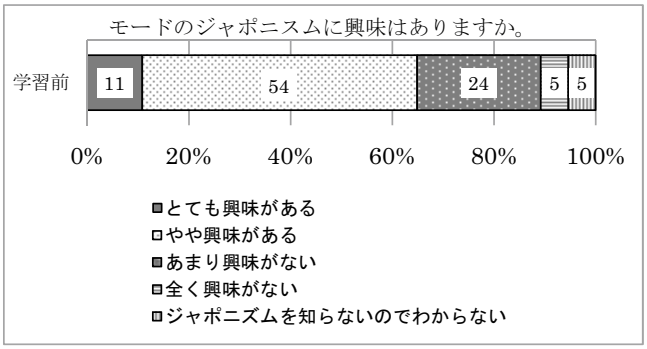



**図２　モードのジャポニスムへの興味**

今回，学習効果を測るために，アンケートは33の質問項目で構成した。項目の大部分は表４・表５に示したとおりである。項目毎に「とてもそう思う」，「ややそう思う」，「どちらともいえない」，「あまりそう思わない」，「そう思わない」を尋ねて，それぞれに５，４，３，２，１点を与えた。図３は，各項目の学習前と後の得点の変化を示したものである。

**表４　布や縫うことに対する意識を知るための質問**

| | |
|---|---|
| Ｑ１ | 布製品を店で購入するよりも自分で布を使って製作を行う方がよい。 |
| Ｑ２ | 衣服に破れやほつれができたときは，自分で補修すればよい。 |
| Ｑ３ | 針で布を用いた製作を行うことが得意である。 |
| Ｑ４ | ミシンで布を用いた製作を行うことが得意である。 |
| Ｑ５ | 簡単なものであれば布を用いた製作を行ってみたい。 |
| Ｑ６ | 授業などで自分で製作した布製品は積極的に使いたい。 |
| Ｑ７ | ハギレの布を用いて製作を行うことには，意義があると思う。 |
| Ｑ８ | 布を用いて実用的なものよりも小物を製作することに興味がある |
| Ｑ９ | 自分で破れやほつれを修繕できるように，基礎的な裁縫技術を身につけたい。 |
| Q10 | 布を用いて既製品にはないようなものを作ってみたい。 |

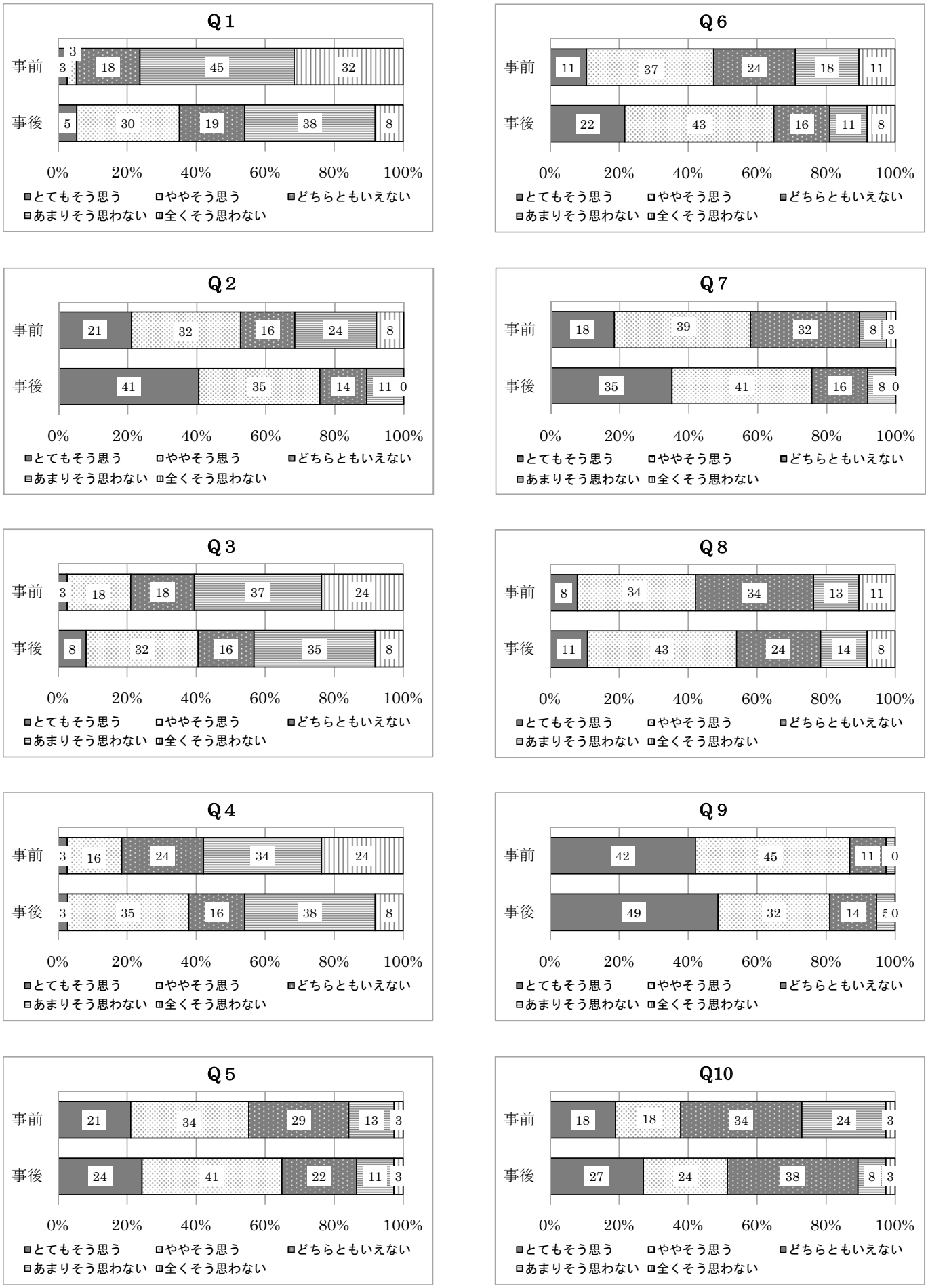
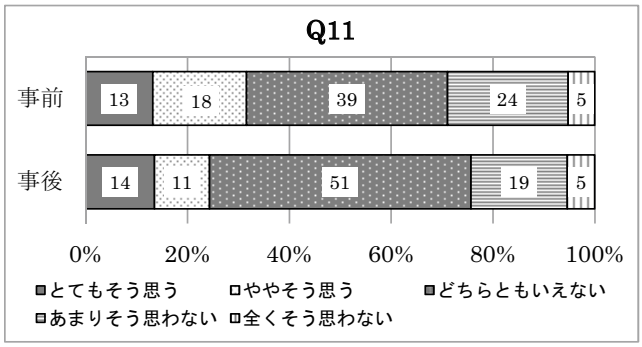



**図３　学習の事前と事後の意識　（１）**



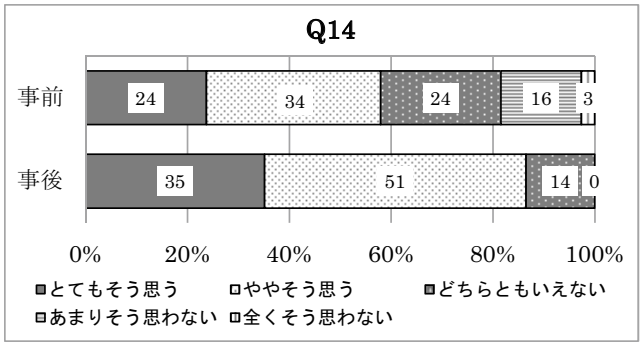
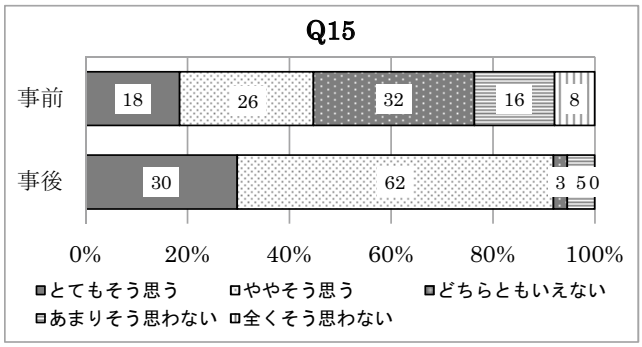
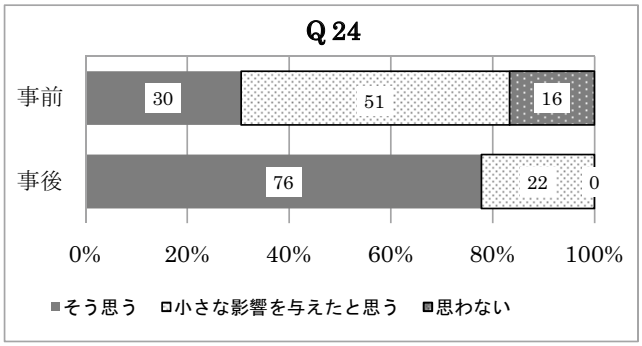
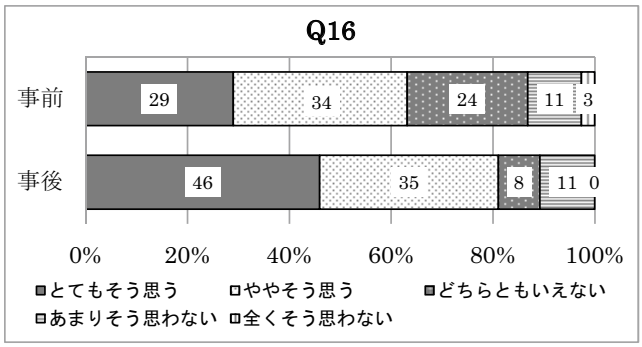



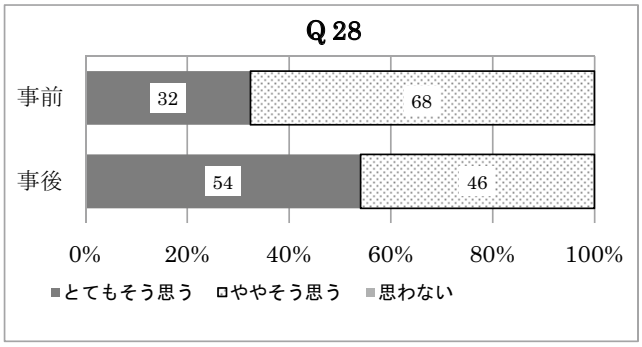

**表５　衣生活の文化や歴史に関する知識と意識を知るための質問**

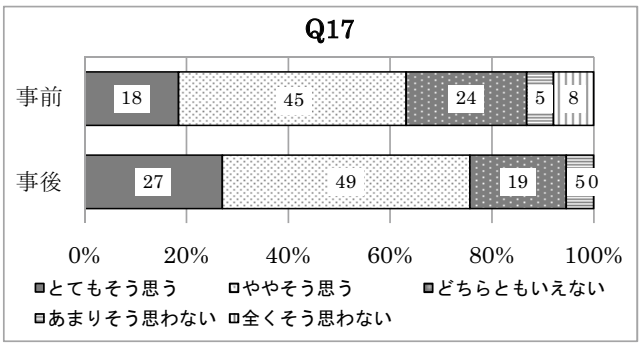
| | |
|---|---|
| Q11 | 布を用いた製作を行う時間があれば他のことをした方が良い。 |
| Q14 | 布の素材感に触れることは大切である。 |
| Q15 | 和服と洋服の構造の違いがわかる。 |
| Q16 | 着物やはかまなど日本の伝統的な衣服に興味がある。 |
| Q17 | 写真よりも実物のドレスに触れてみたい。 |
| Q24 | 日本の着物は，西洋の衣文化に大きな影響を与えたと思うか。 |
| Q28 | 日本の衣文化の歴史について学ぶことは意義があると思うか。 |
| Q29 | 西洋文化の歴史について学ぶことは意義があると思うか。 |



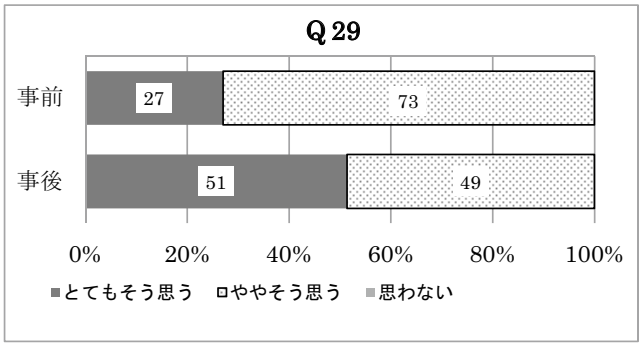




**図３　学習の事前と事後の意識　（２）**

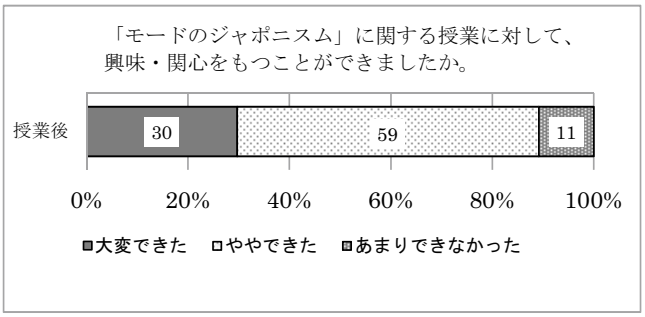



**図４　今回の授業に興味･関心がもてたか**

（図４）が示しているとおり,授業実践後のアンケート調査では,「モードのジャポニスムに関する授業に対して，興味・関心をもつことができたか。」という質問に関して,「大変できた」は30%（11人),「ややできた」は59％（22人)「あまりできなかった」は11％（４人）となった。前２者をたし合わせると，この授業に興味･関心をもった生徒は89％と高い数値になった。授業の前後で興味に関して差があるかどうかを知るためにt検定をしたところ，１％の危険率で有意差が見られ，事後に確かに意識が高揚したことが示された。

（図３）は，表４・５に記した各質問について，事前と事後の肯定･否定の割合を示したものである。「Ｑ９」を除く全ての項目において，事後が肯定的な反応を示していることから，今回の授業が高い効果をあげたことが分かる。統計的な確証を得るために，各項目についてｔ検定を行ったところ，事前と事後で有意な差が見られたのは,「Ｑ１」(１％の危険率),「Ｑ２」(１％の危険率),「Ｑ３」(５％の危険率),「Q14」(１％の危険率),「Q15」(1%の危険率),「Q29」(１％の危険率）であった。

「Ｑ１」,「Ｑ２」,「Ｑ３」において有意差が見られたことは，今回の授業が，布による製作の機会をもたなかったにもかかわらず，自己と布・衣服との関係を強めるという効果を有した，と解釈できる。また「Q14」と「Q15」については，衣装の実物を教室に展示し，間近で観察をさせたり，素材に触れさせたことによって有意差が出たと思われる。「Q29」については,「モードのジャポニスム」の学習によって，日本と西洋の服飾文化がまぎれもなく交差した時代があったことを認識し，衣装を巡る歴史的な事実を学ぶことに楽しみや意義を見出したということであろう。

以上に加えて，学習後に,「モードのジャポニスムを知ることで刺激になったことは何か。」という質問をした。50％以上の生徒が答えたのは,「日本の伝統の持つ力」(23人),「着物の美しさ」(22人),「伝統から新しいものを生み出すちから」(20人),「概念にとらわれないデザイナーの発想」(18人）ということであった。

このように今回の授業は，通常の家庭科授業の範囲を超えて，衣生活の歴史や文化の世界に生徒を誘い，この領域の学習に新しい価値を付加することになった。

### （５）ワークショップの実際

2012年12月１日（土)，広島大学附属中等教育研究大会において「モードのジャポニスム―布の力再発見―」というテーマで家庭科ワークショップを行った。

着物は日本の伝統的な衣装である。明治以来，日本のファッションは西欧をお手本にしていると思われてきたが，実は日本が一方的にまねたものではない。着物が西欧のファッション変革に影響を与えたことは,「モードのジャポニスム」として深井晃子氏らによって研究が深められている[3)]。今回のワークショップにおいては,「モードのジャポニスム」と「西洋のファッション革命」を感じ取ることのできる衣装を展示した。それらは，1900年代初頭に欧米に輸出された着物風ガウン，19世紀後期に西欧で流行したバッスル・スタイルのドレス，衣装革命後のアール・デコのフラッパードレス，西欧で好まれ，ルノワールの絵画「エリオ夫人」に描かれている衣装に似た武家階級の着物(藤・秋草・水紋などの刺繍と摺匹田)など17点であった。

ワークショップではインド更紗の解説，インド更紗の小物製作を含めて３テーマを入れたため，時間不足のため展示された衣装の詳しい解説ができなかった。衣装を展示することの意義，実物の衣装展示の解説方法，モードのジャポニスムをテーマにした衣装のディスプレイ方法を工夫することが今後の課題である。

## ５．授業モデルの構築に向けて―おわりにかえて

今回の授業は,「モードのジャポニスム」をコアとしながらも，現代社会における廃棄衣料品の問題や三宅一生の東北布紀行にまで内容が及ぶ，質・量ともに充実したものであったと自己評価している。したがって，表２に示した学習過程に沿って，授業モデルを構築することが可能である。ただしその際には，展示衣装をどのように授業展開へ位置づけるか，授業実践にいかに活用していくか，という点について考察を深めるとともに，意味ある布を材料とした小物製作を学習活動の最終段階に据えるなどの改善を加えて，モデルの質的向上を図ることが不可避であると考えている。

### 引用･参考文献

１）柴静子，日浦美智代，一ノ瀬孝恵，高橋美与子，

佐藤敦子，木下瑞穂，高田宏「針と糸の民『モン族』の暮らしと織物の教材化に関する研究」，『広島大学学部･附属学校共同研究紀要』第38号2009，pp.155－160.

2）京都服飾文化研究財団編『図録　モードのジャポニスム』，京都服飾文化研究財団，1996.

3）深井晃子「ジャポニスム・イン・ファッション」，平凡社，1994.